

戦後の飯田・下伊那地域の芸能

小池美津貴

戦後の飯田・下伊那地域の芸能概観

戦後の混乱期	娯楽への飢え、価値観のゆらぎ、原点回帰 ⇒人形芝居、歌舞伎、新劇、映画…
高度成長期	テレビの登場による娯楽の多様化⇒伝統芸能として保存の動き
現在	地域活性化への利用⇔地域のしがらみ、過疎、高齢化、継承の難しさ

立花興行社 創業 戦前か? 経営者 池場金次郎 (岐阜県郡上出身)

飯田・下伊那地域の各地のお祭りや慰安会にて芝居や余興の興行を請け負っていた。また、飯田市内の常設の劇場 (面白クラブ:飯田市仲ノ町で戦後も週に 2.3 日は経営、大松座:飯田市銀座にあったが大火で焼失) でも公演を行った。主に戦後から昭和 40 年頃まで経営。市内にほかにも興行社はあったが、立花が最大であった。



右から) 江戸町周辺昭和 30 年頃の地図、今も残る立花興業の看板“芸能一般立花●●”、飯田の常設劇場での公演の様子『菅原伝授手習鑑 車引の場』(戦前か?・小山茂子氏所蔵写真)

例えば、村で「祭りでなにか面白い芝居が見たい」という希望がある場合

- ①立花興行社に依頼。予算に応じた出し物を提案してくれる
- ②公演が決まると、興行主である池場金次郎氏が飯田近辺にすむ芸人達や衣装屋、義太夫語り、三味線弾きなど芝居に必要なメンバーを手配
- ③配役は公演の前日に決定し、公演

また、「自分達で芝居をしたいけれど、どうやるのだろう?」という場合

- ①地域の中老たちが芝居を企画。青年達に役付をする。

- ②地域の芝居好きな者が稽古指導をし、稽古の仕上げに芸人達を振付師として依頼。
- ③当日には芸人達が化粧、着付けなど担当。また、芸人達が手配をした衣裳屋の衣裳を身につけ舞台に上がる。飯田市には河合、鼎町には秋山という衣裳屋があった。
- ④舞台は仮設(かけ小屋)、常設(神社の境内など)と様々であった。

半プロの芸人達(兼業芸人)

飯田市は飯田・下伊那地域の中心地であるが大都市というほど大きくはなく、芸能活動だけでは生計が立ちづらかった。立花興行は芸人を抱えてはおらず、芸人たちは出演要請があるのみ活動した。看板描や美容師など他の職業を持つ兼業芸人が多かった(半プロ、セミプロ)。彼らの多くは岐阜や名古屋など他の地域で芸を身に付け、飯田に流れ着いたという経歴のようである。その他、旦那のつかない芸者が役者としての活動をするケースもあったが、飯田で育った芸人はほとんどいなかったと言える。そのため、娯楽が多様化し、芝居の需要が減る昭和40年頃、飯田から芸人達は姿を消した。

“伝統芸能”と呼ばれているものの原点とこれから

現在、飯田・下伊那地域では黒田人形、今田人形、大鹿歌舞伎、下條歌舞伎、平谷歌舞伎が活動を続けている。人形浄瑠璃、歌舞伎といった芸能は都市部で発展し、その周辺へ伝播していったものである。とくに都市周辺では玄人の中でもまだ出番が少ないもの、素人が玄人より芸を習うものなどがいた。こうしたものが飯田・下伊那地域に移り住んだ、というケースが多い様である。先に挙げた5団体も半プロの芸人達の影響を受け発生、継承されてきたが、現在では飯田・下伊那地域にそういった人々はいない。また、そうした人々から影響を受けた世代の高齢化も進んでいる。1984年に発足した「伊那人形芝居保存協議会」では師匠を招聘して4座合同の義太夫、三味線、(のちに操の研修会)が行われているが、その回数は少ない。一方、歌舞伎はそういった研修会の例はなく、記憶による継承の限界を迎えつつある。かといって完全に玄人の真似をするだけでは意味がないし、素人に玄人と同じことは出来ない。一地方でどう続けていくか、続けられないか。地域ごとに芸能が続けられてきた意味をどう問うべきなのか。

参考文献

村沢武夫『伊那の芸能』伊那史学会,1967.

飯田市歴史研究所『飯田・下伊那史料叢書 建築物編2 農村舞台』飯田市歴史研究所,2012.

小池美津貴「ライフヒストリー竹本巴妙聞き書きー伊那谷で祖父は地芝居をー」『飯田市歴史研究所年報』11, 2013, 89-143.

飯田市歴史研究所近現代史ゼミナール「立花興業者の子役として小山茂子」『聞き書きー飯田町の暮らし5ー大正昭和期・飯田町の社会史』,2013.